台大日本語文研究第 40 期
2020 年 12 月，頁 21-49
2020-09-29 收稿，2020-11-25 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202012_(40).0002

《日本書紀》中之「齊明紀」的記述方法
—以「大規模土木工程」與「怪異事件」之相關敘述為中心

鄭家瑜*

摘要

《日本書紀》所記載的四十一位天皇之中，齊明天皇（寶皇女）相當地獨特。在舒明天皇駕崩後，寶皇女以舒明天皇皇后的身分登基，成為了皇極天皇。但歷經數年孝德天皇的時代後，又以六十二歲的高齡再度即位，成為了齊明天皇。皇極・齊明天皇身為日本史上首次重祚的天皇，相當知名。本論文著眼於這位古代知名的女帝--齊明天皇，並以《日本書紀》「齊明天皇紀」(以下簡稱「齊明紀」)中的「大規模土木工程」與「怪異事件」等相關敘述為中心，藉以探索《日本書紀》「齊明紀」的記述方法。

透過上述的考察，可以得知「齊明紀」描繪出積極開拓兼具宗教、政治、實用性的近代化都城、並且用心構築以大和朝廷為中心之「小中華思想」的齊明天皇形象。同時，透過怪異事件的相關記載，也可以看出「齊明紀」頻繁使用了中國史書五行志等漢籍中常見之預告、比喻、諷刺的手法。從這幾點也可以知道「齊明紀」受到中國思想以及漢籍表現的影響甚多。

關鍵詞：日本書紀、齊明天皇、小中華思想、大規模土木工程、
怪異事件

* 政治大學日本語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Writing Style of Chronicle of Emperor Saimei in *Nihon Shoki*: Centered on the text of "large-scale civil engineering" and "weird events"

Cheng, Chia-yu*

Abstract

Among the 41 emperors documented in *Nihon Shoki*, Emperor Kougyoku/Saimei as the first emperor ascended the throne twice in Japanese history is quite well-known. This thesis is focused on Emperor Saimei, centered on the text of “large-scale civil engineering” and “weird events” of Chronicle of Emperor Saimei in *Nihon Shoki*, and tries to find out the writing style of the Chronicle.

Through the study as above, the text pictured out a modernized capital combining functions of religion, politics and practicality, and the image of Emperor Saimei with " Little China Conception " centered on Yamato imperial court was built up. Meanwhile, in the text about “weird events”, there are a lot of rhetoric methods like metaphor and irony frequently appearing in China’s ancient books like chapters of five elements in China’s historical records. From these findings, it is evident that Chronicle of Emperor Saimei largely adapted China’s ideas and writing styles in China’s ancient books.

Key words: *Nihon Shoki*, Emperor " Saimei ", Little China Conception, large-scale civil engineering, weird event

* Associate professor of Japanese Language and Culture, National Chengchi University

臺灣大學學術期刊資料庫

『日本書紀』における「斉明紀」の記述方法
—「大規模土木工事」と「怪異事件」を中心に

鄭家瑜*

要旨

『日本書紀』に記されている四十一人の天皇の中で、斉明天皇（宝皇女）は非常に独自性の強い天皇である。たとえば、舒明天皇が崩御した後、皇位継承者がいるにもかかわらず、宝皇女が舒明天皇の皇后として即位し、皇極天皇になった。さらに、孝徳天皇の時代を間に挟み、六十二歳の高齢で再び即位して斉明女帝となったのである。日本史上初の重祚をした天皇として皇極・斉明天皇はよく知られている。本稿ではこの高名である斉明天皇に着目し、『日本書紀』「斉明天皇紀」（以下、「斉明紀」と略す）における「大規模土木工事」「怪異事件」という二項目に焦点を置き、「斉明紀」の記述方法を考察することを試みた。

以上の考察により、「斉明紀」には宗教、政治および水路といった実用性のある近代化された都づくりに腐心し、大和王朝を世界の中心とする「小中華思想」を強調しようとする斉明天皇像が描かれていることが分かる。さらに、中国史書の五行志を始め、漢籍によく見える予告・比喩・風刺の手法が頻繁に用いられていることも認められる。これらのことからも、『日本書紀』「斉明紀」は中国の思想・漢籍の表現からの影響が大きいと言えよう。

キーワード：日本書紀、斉明天皇、小中華思想、大規模土木工事、怪異事件

* 政治大学日本語文学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『日本書紀』における「斉明紀」の記述方法
—「大規模土木工事」と「怪異事件」を中心に

鄭家瑜

一、はじめに

『日本書紀』は七二〇年に成立し、日本に伝存する最古の正史とされている。『日本書紀』は三十巻からなり、編年体によって編纂され、漢字で表記されている。最初の二巻が神々の話を記載する「神代紀」と呼ばれているのに対して、第三巻以降は神武天皇（初代）から持統天皇（41 代）までの事績を叙述する「天皇紀」の構成をもつ。

この『日本書紀』に記されている四十一人の天皇[1]の中で、斉明天皇は非常に独自性の強い天皇である。『日本書紀』「斉明天皇紀」（以下、「斉明紀」と略す）の冒頭によれば、斉明天皇（宝皇女）は用明天皇の孫である高向王と結婚し、漢皇子を設けたが、のち舒明天皇（34 代）の皇后となり、二男一女を生んだ。夫の舒明天皇が崩御してからは、皇位継承者を決めかねる状態で、蘇我蝦夷らの要請によって舒明の皇后として即位し、皇極天皇（35 代）になったのである。

だが、皇極四年に乙巳の変が勃発した直後、皇極は同母弟の軽皇子（後の孝徳天皇）に譲位したものの、孝徳天皇の早逝により、六十二歳の高齢で重祚し、「斉明天皇」となった。日本史上初の重祚をした天皇として皇極・斉明天皇はよく知られている。それだけではなく、大規模土木工事を多く行ったり、百済のために自ら救援軍を率いたりしたことでも、斉明天皇は高名である。したがって、本稿ではこうした高名な女帝—斉明天皇を中心に考察を行いたい。

斉明天皇の関連記事は『日本書紀』「斉明紀」に詳しく記されているが、「斉明紀」には主に、斉明天皇の即位、大規模土木工事、皇孫建王の崩去と挽歌、有間皇子事件、百済救援のための出兵、天皇崩御、怪異事件といったことが記されている。この内の有間皇子事件については、蘇我赤兄の言う斉明天皇の三大失政（主に大規模土木工事）によって謀反を挑発されたので、大規模土木工事と併せて検

[1] 系譜は存在するがその事績が記されない第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの八人の天皇（欠史八代と呼ばれている）を含む。

臺灣大學學術期刊資料庫

討できる。また、皇孫建王の崩去による一連の挽歌は歌の研究にとっては重要だが、歌の研究として別稿に譲りたい。そして、百済救援と天皇崩御は一連の怪異事件に纏わるため、怪異事件と併せて見る必要がある。したがって、本稿では、「大規模土木工事」「怪異事件」という二項目に焦点を置き、「斉明紀」の記述方法を考察していきたい。

なお、以下、各テクストの原文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。傍点・下線はすべて筆者によるものである。

二、大規模土木工事

さて、斉明朝の大規模土木工事として、主に須弥山、三つの宮殿（両槻宮、後飛鳥岡本宮、吉野宮）及び狂心の渠の造営が挙げられるが、その中で、後飛鳥岡本宮、吉野宮に関わる描写が少ないため、以下は須弥山、両槻宮、狂心の渠を中心に検討をすることにする。

（一）須弥山の造営

まず、「須弥山の造営」について見てみたいが、『日本書紀』では「須弥山」の初登場は「推古天皇紀」である。推古二十年是歳条には次のような記事がある。

> 自百済国有化来者、其面身皆斑白、若有白癩者乎、悪其異於人、欲棄海中嶋、然其人曰、若悪臣之斑皮者、白斑牛馬、不可畜於国中、亦臣有小才、能構二山岳之形、其留臣而用、則為国有利、何空之棄海嶋耶、於是、聴其辞以不棄、仍令構須彌山形及呉橋於南庭，時人號其人曰路子工，亦名芝耆摩呂。

すなわち、百済から来た重い皮膚病の者（路子工、亦の名は芝耆摩呂）に須弥山と呉橋を作らせたという内容である。しかし、この記事は、単に百済人に須弥山を作らせたと記しただけで、須弥山の造営について具体的な描写がなかった。この記事を引き継いで須弥山のことを記したのは「斉明紀」である。「斉明紀」には次の三か所に須弥山のことが記されている。

① 斉明三年七月条

> 己丑、覩貨邏国男二人・女四人、漂泊于筑紫、言臣等初漂泊于海見嶋、乃以駅召。辛丑、作須弥山像於飛鳥寺西、且設盂蘭盆会。暮饗覩貨邏人。或本云、堕羅人。

臺灣大學學術期刊資料庫

② 斉明五年三月条

甲午、甘檮丘東之川上、造須弥山、而饗陸奥与越蝦夷。檮、此云柯之。川上、此云箇播羅。

③ 斉明六年五月条

是月、有司奉勅、造一百高座・一百納袈裟、設仁王般若之会。又皇太子初造漏剋、使民知時。又阿倍引田臣闕名。献夷五十餘。又於石上池辺作須弥山。高如廟塔。以饗粛慎四十七人。又挙国百姓無故持兵、往還於道。国老言、百済国失所之相乎。

さて、①についてだが、全文は覩貨邏人が入唐の途中に日本の筑紫へ漂流してきたが、斉明天皇はこれらの漂流してきた覩貨邏国の六人を呼び、上京させ、さらに飛鳥寺の西に須弥山を作り、盂蘭盆会を設け、夕方になると、覩貨邏人を饗宴したという。②は斉明天皇五年に甘檮丘東之川上に須弥山を作り、陸奥と越蝦夷を饗宴する話である。③は斉明天皇六年に阿倍引田臣が夷五十餘人を献上するので、石上池のほとりに「高如廟塔」とあるごとく、巨大な須弥山を作り、粛慎四十七人のために、宴を催したという。

ところで、①にある「暮饗」の「暮」は夕方の時間を表すほかにならない。②の「而饗」の「而」は順接の意味も逆説の意味もあるが、ここでは順接の意味で、「しかして」「そこで」という意と捉えられる[2]。③の「以饗」の「以」は「〈もって〉…によって。…のゆえに。根拠・理由を示す。」という意味である[3]。このように、②と③の須弥山は「饗宴」のために造られたものであることが示唆されている。全体からみれば、①～③の須弥山はいずれも「饗宴」の場所として登場したように描かれているのである。

また、この三つの記事に書き記されている饗宴の対象について、②は蝦夷、③は粛慎とある。蝦夷とは古代日本に北関東から東北・北海道にかけて住み、朝廷の支配に抵抗し服属しなかった人々のことである[4]。日本の粛慎とは日本の最北部に居住する「蝦夷の一部」

2 而、新選漢和辞典 Web 版、japanknowledge、https://reurl.cc/XkKkY3（2020/12/3 アクセス）

3 以、新選漢和辞典 Web 版、japanknowledge、https://reurl.cc/m9K9jW（2020/12/3 アクセス）

4 蝦夷について、『大辞林 第三版』では、「〔アイヌ語のエンジュ・エンチウ（人、の意）からという〕 古代に、北関東から東北・北海道にかけて住み、朝廷の支配に抵抗し服属しなかった人々。」と解釈している。【蝦夷、大辞林 第三版、japanknowledge、https://reurl.cc/5qorA6、2020/8/24 アクセス】

臺灣大學圖書館版權所有

と考えられている[5]。要するに、②も③も大和政権に従わない人々で、まだ「王化」されていない蛮族である蝦夷を指していると見られる。これに対して、①の饗宴の対象は覩貨邏人だが、割注によれば「暮饗覩貨邏人。或本云、堕羅人。」という。覩貨羅（堕羅）は「タイ・インドの国名および地名[6]」とされており、『令集解』職員令玄蕃寮条所引古記によれば、「古記云。在京夷狄。謂墮羅。舎衛。蝦夷等。」とあるごとく、堕羅は舎衛・蝦夷等と並んで大和朝廷に「夷狄」と取り扱われていたのである。

以上の記述からも、「斉明紀」に描かれている須弥山は、いずれも饗宴の場所として登場し、さらにその饗宴の対象はすべて「王化」されていない「夷狄」であったことが指摘できる。

果たして「須弥山」とはどのような所なのか。『国史大辞典』によれば、それは仏教宇宙論における世界中心的な巨山のことで、太陽、

なお、『国史大辞典』では、「『日本書紀』景行紀によれば、その東夷のうちから、もっとも暴強な分子を区別して、これを「蝦夷」と書きあらわすようになった。（中略）「蝦夷」字で「えみし」を表現するのは、七世紀中ごろからで、それ以前、これにあたるものは「毛人」と書かれていたことがわかる。」とある。【蝦夷、国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/0O0M1o、2020/11/28アクセス】

5 『世界大百科事典 第2版』によると、「日本古代に，最北地方およびそこに居住した人々に対する呼称。《日本書紀》欽明紀に佐渡島に粛慎人が船できたとの記事があり，また斉明紀には阿倍比羅夫が粛慎と戦ったとの記事がある。中国では東北境外の異民族を粛慎（しゆくしん）と呼んだので，同系とみる説もあるが，日本の最北部に居住する蝦夷（えみし）の一部，またはアイヌをさすとの説などがある。」とある。【粛慎、世界大百科事典 第2版、japanknowledge、https://reurl.cc/GrdmM3 、2020/8/24アクセス)

また、『国史大辞典』では、「前六・五世紀以来中国の東北境外を領域とする民族の名称で、中国の古典にみえる。矢と石弩を用いることが特徴とされている。（中略）『日本書紀』をはじめ日本の史料にも日本の東北地方以北の住人として、粛慎の名が散見している。（中略）中国の古典にみえる民族名をその知識によって日本の東北地方の民族にあてたものとみるか、見解が分かれているが、後者のように考えるべきであろう。」とある。【粛慎、国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/R1G3ke 、2020/11/28アクセス）】

6 『新編日本古典文学全集 4—日本書紀 3』(p.198頭注)によれば、「その所在には異説があるが、タイ国のドヴァーラヴァティとする説が有力。『旧唐書』巻百九十七・南蛮伝・堕和羅国の条に「貞観十二年(六三八)、其王使ヲ遣シ方物ヲ貢ズ。二十三年、又使ヲ遣シ象牙・火珠ヲ献ジ 」とあり、唐に朝貢していた。それが入唐途中に遭難したもので、斉明紀三年条の覩貨邏人も同じ時の遭難かとみる」という 。また、『国史大辞典』によれば、覩貨羅とは「タイ・インドの国名および地名。吐火羅は覩貨羅・堕羅とも書き、『日本書紀』白雉五年（六五四）四月条に、吐火羅国の男二人・女二人が舎衛の女一人とともに日向に漂着したとあるのを初見とし、同書に六例みえる。」という。【吐火羅・舎衛、国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/XkeW90、2020/8/24アクセス】

臺灣大學學術期刊論文

月、星が須弥山を中心に水平に回っていると信仰されていたという[7]。また、『日本国語大辞典』によれば、須弥山の中腹の四方に四天王の宮殿、頂上には帝釈天の住処である三十三天の宮殿があるという[8]。これらの解釈からも、「須弥山」は、世界の中心であり、諸天の真ん中にあり、その山頂に天帝である帝釈天が住んでいる所として理解できよう。それと同時に、斉明朝が作った「須弥山」の像もまた、こうした中国・日本の仏教徒の間で古来信奉されてきた須弥山信仰に基づいたものだと考えられる。

従来、大和朝廷における蝦夷に対する統治は重要視されていたが、斉明朝もまた変わらなかった。斉明天皇が即位した年、すぐに「秋七月己巳朔己卯、於難波朝饗北北越。蝦夷九十九人。東東陸奥。蝦夷九十五人。并設百済調使一百五十人。仍授柵養蝦夷九人、津刈蝦夷六人、冠各二階。」と、難波で北越の蝦夷九十九人、東陸奥の蝦夷九十五人を饗宴し、さらに柵養している蝦夷九人[9]および津刈の蝦夷六人に、二階の冠を授与した。また、同年の是歳条では「高麗・百済・新羅、並遣使進調。百済大使西部達率余宜受、副使東部恩率調信仁、凡一百餘人。蝦夷・隼人率衆内属、詣闕朝献。」とあるように、高麗・百済・新羅の朝鮮諸国が大和王朝に朝貢した際に、蝦夷・隼人達も朝貢したことが記されている。

これらの記事を通じても、大和朝廷が蝦夷・隼人に対して朝鮮諸国と同じ対応をし、饗宴または冠位を与えた事情が分かる。冠位を授与する行為は「君臣関係」を示す意義があるのは言うまでもない。朝貢をすることもまた、大和朝廷と蝦夷・隼人との間に「支配—被支配」といった関係を築いたのである。つまり、冠位・朝貢などの政治行為により、大和朝廷は蝦夷・隼人との間に、「君臣関係」また、「宗主国—朝貢国」「支配者—被支配者」という関係をなしたのである。

---

7 須弥山、国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/N6yaAk （2019/7/25 アクセス）

8 須弥山、日本国語大辞典、JapanKnowledge、https://reurl.cc/gmavQN（2020/4/16 アクセス）

9 「柵養蝦夷」について、『新編日本古典文学全集 4—日本書紀 3』(p.204 頭注) の解釈によれば、「柵で養う蝦夷、の意か。そうであれば後の夷俘・俘囚（律令政府に帰服した蝦夷の前身）」という。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

しかし、蝦夷・隼人は、冠位を受け、朝貢をしたにもかかわらず、常に大和朝廷に服属する状態にあったわけでもなかった。斉明四年夏四月条には「夏四月、阿倍臣闕名。率船師一百八十艘伐蝦夷。齶田・渟代二郡蝦夷、望怖乞降。」とある。朝廷が阿倍臣を派遣し、一百八十艘の船の兵士を率いて蝦夷を討伐し、齶田・渟代二郡蝦夷がその勢いを怖がって投降したという。また、斉明五年三月条には「是月、遣阿倍臣、闕名。率船師一百八十艘、討蝦夷国。阿倍臣簡集飽田・渟代二郡蝦夷二百四十一人、其虜三十一人、津軽郡蝦夷一百二十人、其虜四人、胆振鉏蝦夷二十人於一所、而大饗賜禄。」とある。こうして、斉明朝は蝦夷に対して、時々軍隊を出して征伐し、改めて従属させなければならなかったのである。

斉明四年秋七月辛巳朔甲申条には次のような記事がある。

> 秋七月辛巳朔甲申、①蝦夷二百餘詣闕朝献。饗賜贍給。有加於常。②仍授柵養蝦夷二人位一階、渟代郡大領沙尼具那小乙下、或所、云授位二階使検戸口。（中略）又詔渟代郡大領沙尼具那、③検覆蝦夷戸口与虜戸口。

この中で、①のごとく、二百餘人の蝦夷が来朝し、朝廷に献物したので、朝廷も彼らを厚く饗応し、多くの賜物があったという。斉明四年夏四月の蝦夷への征伐は同年の秋七月に大勢の蝦夷が朝廷に献物したことからもその効果が見える。つまり、討伐された後の服属の意を表そうとするため、蝦夷は「二百餘詣闕朝献」をしたのである。蝦夷の行動に対して、斉明朝は彼らを饗宴し、多くの物を与えたのみならず、②のように「柵養蝦夷二人位一階」と、冠位も与えたという。大和朝廷と周囲にある蛮族の間に常にこうした緊張関係を保ち、朝貢・饗宴・冠位授与などが繰り返されている様子は以上の記述からも想定できよう。

そして、②にある、冠位を受けた二人は主に「検戸口」の責務、つまり蝦夷の戸籍を調査するという仕事を与えられている。「検戸口」のことは再び③「検覆戸口」という用語で現れているが、蝦夷に対する戸籍調査が斉明朝に重要視されていたことが窺える。蝦夷を管理するには蝦夷の人口を把握することが重要だからである。かつて孝徳朝における大化改新でも、「検戸口」（戸籍調査）を改新の重点として実施していたが、斉明朝も同じ路線を進めていたことが分かる。特に、蝦夷らの不服民に対しては一層慎重であった。

臺灣大學學術期刊資料庫

このように、斉明朝と蝦夷との間にも「主—従」「統治者—被統治者」という関係が存在しており、斉明朝は、常に討伐と饗宴・賜物・冠位授与、という硬軟両様の戦術をとっていたことは以上の考察を通して分かる。饗宴もまた冠位授与と同様に、王権を示そうとする所作で斉明朝の「蛮族」を統治し、王化させる政策の一環としての意義を持つことが指摘できる。

こうした「饗宴」の持つ意義を念頭において改めて「須弥山」で饗宴することを考えれば、斉明朝が従来の仏教信仰にある世界の中心である須弥山信仰を政治の外衣に包み、自ら世界の中心となろうとすると同時に、蛮族を服属させようとしていた営為だと理解できる。このようなことからも、須弥山造営の背後には「中心と周縁」「文明と野蛮」「統治者と被統治者」といった二元対立の構造が存在していたことが認められる。さらに、この二元対立は中国帝国が周囲の夷狄に対する関係の中で明白に現れている。これは「華夷思想」または「中華思想」と呼ばれているものである。斉明朝はこうした「中華思想」を学び、朝鮮諸国および蝦夷・隼人などとの間に、中国帝国を模倣した日本の小帝国[10]を築こうとしていた。ここでは、「小中華思想」と呼ぶことができよう[11]。

---

[10] 古代日本と隣国・諸藩の関係について、石母田正（1973）『日本古代国家論第一部』（東京、岩波書店、pp.330-354）に詳しい。石母田氏は中国の唐帝国に対して日本では「東夷の小帝国」の思想があったと指摘している。

[11] 「小中華」という用語に関して、森公章（1998）『「白村江」以後—国家危機と東アジア外交』（東京、講談社、p.8）では「日本はこの時期、七〇一年にすでに大宝律令を制定し、唐と同様の律令国家を確立していた。そこで、多くの国々の心服をえた帝国たる唐の下にあって、自らも唐と同様の律令体制をもつ国として、朝鮮諸国に対しては〈小帝国〉・〈小中華〉として君臨しようとしたと考えるわけである。」と指摘し、「小帝国」と並んで「小中華」という用語を使った。また、川本芳昭（2002）「漢唐間における「新」中華意識の形成：古代日本・朝鮮と中国との関連をめぐって」（『九州大学東洋史論集.30』、福岡、九州大学文学部東洋史研究会、p.16）では、「古代の日本において中華意識の形成があったこと、同様の動きは高句麗や百済、新羅にあっても生じた（中略）」と指摘している。

それに、中国や韓国の研究者においてもこの用語は常に用いられている。たとえば、倪佑密（2012）「古代日本華夷思想的萌芽以及發展軌跡——以漢唐時期中日外交文書為中心」（『青年文學家』、黑龙江齐齐哈尔、青年文学家杂志社、2012年第11期、pp.84-86）では「漢唐時期，日本便由一個典型的朝貢國漸漸萌生出自己的小中華思想」とあり、謝桂娟（2015）『華夷觀與傳統東亞國際秩序研究』（吉林、延邊大學世界史研究所）では、「朝鮮産生了"小中華"意識」とある。また、韓国の姜智恩氏によれば、「朝鮮儒者素以<小中華>自任，因此被定位為<朝鮮中華主義>」という。【姜智恩（2017）「"華夷秩序"的東亞構架與自解體內情」（『中央研究院近代史研究所集刊』第96期、台北、中央研究院近代史研究所、pp.31-60】。これらの論文は日本または朝鮮で生じた、

「小中華」といった概念は三橋正「仏教受容と神祇の形成―神仏習合の源流―[12]」にも見られる。氏は「覩貨邏は東南アジア系の民族、蝦夷（夷）と粛慎は北方の蕃族とされており、いずれも小中華としての日本へ服属した人々を饗宴する際に〈須弥〉山が作られたことがわかる。」と指摘したのである。

ちなみに、斉明五年七月条には「秋七月丙子朔戊寅、遣小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥、使於唐国。仍以道奥蝦夷男女二人示唐天子。」とあるが、この記事の割注には次のような記述がある。

> 天子問曰、此等蝦夷国有何方。使人謹答、国有東北。天子問曰、蝦夷幾種。使人謹答、類有三種。遠者名都加留、次者麁蝦夷、近者名熟蝦夷。今此熟蝦夷。毎歳入貢本国之朝。天子問曰、其国有五穀。使人謹答、無之。食肉存活。天子問曰、国有屋舎。使人謹答、無之。深山之中止住樹本。天子重曰、朕見蝦夷身面之異、極理喜怪。使人遠来辛苦。退在館裏。後更相見。

せっかく斉明初の遣唐使派遣の際、ヤマト朝廷が献上する恒例の産物とは別に、三月の蝦夷討伐で捕虜とした四十九人から選んだ男女二人を同行させたにもかかわらず、唐国の高宗の関心は斉明天皇の心意とはすれ違っていたのである。この点について、入江曜子『古代東アジアの女帝[13]』では次のように述べている。

> 使者もヤマトが蝦夷という属国から朝貢をうける国であることを述べはしたが、高宗は蝦夷の生活環境や食べ物などについての質問を重ねる。高宗にとっては、自国の領域に東方の珍奇な土地が一つ加わった、という程度の認識にすぎず、斉明が意図した小中華としての自己主張は届かなかったようだ。

つまり、「以道奥蝦夷男女二人示唐天子。」ということは、対内的に蛮族としての蝦夷を服属させるのみならず、対外的にも大和王権（斉明朝）が蝦夷といった蛮族を従えたことを、当時の東アジアの帝国である中国朝廷に示そうとしていた意義を持つのである。この

中華意識を模倣する政治意識を「小中華」と呼んでいる。
小中華思想についての検討は鄭家瑜（2020）「『日本書紀』が語る対外戦争―白村江の戦いを中心に―」（『政大日本研究』第17号、台北、政治大学日本語文学科、pp.31-64）に詳しい。

[12] 三橋正（2007）「仏教受容と神祇信仰の形成―神仏習合の源流―」、『宗教研究特集　神仏習合とモダニティ』81巻（2号）、東京、日本宗教学会、pp.136-138

[13] 入江曜子（2016）『古代東アジアの女帝』、東京、岩波書店、pp.84-85

臺灣大學學術期刊資料庫

ことからも斉明天皇の政治的な野心および小中華思想が示唆されていよう。斉明朝に造られた須弥山もこうした小中華思想を体現させるための産物だとして理解できる。

しかし一方、「斉明紀」における須弥山の造営に関して、それが盂蘭盆会、仁王般若之会などの仏教行事に繋がっていることも「斉明紀」における記述の特色の一つとして挙げられる。『魏書』巻一一四志第二十「釋老志」には、北魏の太祖・道武帝による「須弥山殿」の造立の記事がある[14]。また、宋敏求の『長安志』巻五によれば、後秦の高祖（姚興）が弘始七（四〇五）年に長安の永貴里に寺院を建てた際に「須弥山」を作ったという記事がある[15]。これらの用例を踏まえ、常塚聴「日本における須彌山説の受容―世界観の接触の事例として―[16]」では次のように論じている。

> これらの記事に見える「須弥山」の造形には、神仙思想における崑崙山やチベット系民族の伝承が混交していることが推定されている。推古・斉明朝の日本で作られた「須弥山」もその系統を引いていると考えられる。

このように、須弥山は仏教思想、中華思想のほかに、道教思想、神仙思想にも関わっているのである。斉明朝における須弥山の造営を通じて斉明天皇の信仰の一面が窺えると同時に、彼女の政治思想および政治政策も理解できよう。

（二）両槻宮の造営

次に両槻宮の造営について見てみたいが、両槻宮の造営に関して斉明二年是歳条には関連記事がある。

> 是歳、於飛鳥岡本更定宮地。時高麗・百済・新羅並遣使進調。為張紺幕於此宮地、而饗焉。遂起宮室。天皇乃遷、号曰後飛鳥岡本宮。於田身嶺冠以周垣。田身山名。此云大務。<u>復於嶺上両槻樹</u>

---

[14] 『魏書』「卷一一四　志第二十　釋老志」によれば、「天興元年，下詔曰：『夫佛法之興，其來遠矣。濟益之功，冥及存沒，神蹤遺軌，信可依憑。其敕有司，於京城建飾容範，修整宮舍，令信向之徒，有所居止。』是歲，始作五級佛圖、耆闍崛山及**須彌山殿**，加以繢飾。別構講堂、禪堂及沙門座，莫不嚴具焉。」とある。

[15] 宋敏求の『長安志』（一〇七六）巻五には「姚興集沙門五千餘人有大道者五十人起造浮圖於永貴里立波若臺居中作**須彌山**　四面有崇岩峻壁珍禽異獸林木極精奇仙人佛像俱有人所未聞皆以為希奇」とある。

[16] 常塚聴（2009）「日本における須彌山説の受容―世界観の接触の事例として―」、本多弘之編『現代と親鸞』(17)、東京、親鸞仏教センター（真宗大谷派）、pp.33－34

臺灣大學學術期刊資料庫

辺起観、号為両槻宮、亦曰天宮。時好興事、遣使水工穿渠、自香山西至石上山。以舟二百隻載石上山石、順流控引於宮東山、累石為垣。時人謗曰、狂心渠。損費、功夫三万餘矣。費損、造垣功夫七万餘矣。宮材爛矣。山椒埋矣。又謗曰、作石山丘、随作自破。若拠未成之時、作此謗乎。又作吉野宮。

斉明天皇が即位した翌年、飛鳥岡本宮、両槻宮、吉野宮、この三つの宮を造営し、さらに「狂心の渠」と香山の西から石上山までの長い渠を作ったという。この記事によって両槻宮の名前は田身嶺の上、二つの槻樹のそばに作られたことに由来し、この「宮」は「観」でもあり、「天宮」とも呼ばれていたことが分かる。

宮、観、天宮といった三つの呼称について、劉昭瑞「『日本書紀』斉明紀の「天宮」について[17]」では、「観」とは建物の「形式」を重視しており、「両槻宮」とはこの宮殿が槻樹のそばに建てられた意味を持ち、「天宮」とは宗教の神秘的な意味合いが含まれている用語であるが、三者は同一の建物であるとしている。また両槻宮は単なる遊宴のために作られた離宮ではなく、それが一種の「宗教的な施設」で、宗教性格を持つと氏が指摘している。

そもそも、槻は樹勢が盛んでしばしば大木になるので、古来神聖視され、その樹下も聖域とみなされた。特に、法興寺（飛鳥寺）の槻の木の下では重要な儀式や行事がたびたび行なわれたことが『日本書紀』に記されている。『万葉集』においても「ゆつき」「いつき」などと詠まれており、神聖な意義を有している[18]。このような槻の語意からも、両槻宮は一種の「宗教的な施設」で、宗教性格を持つという劉氏の論説に賛同できるものである。

さて、「両槻宮、亦曰天宮」とあるが、「天宮」について中国の『史記·封禪書』では「亳人謬忌奏祠太一方，曰：「天神貴者太一，【索隱】樂汁徵圖曰：「天宮，紫微。北極，天一、太一。」宋均云：「天一、太一，北極神之別名。」春秋佐助期曰：「紫宮，天皇曜魄寶之所理也。」石氏云：「天一、太一各一星，在紫宮門外，立承事天皇大帝。」太一佐曰五帝。古者天子以春秋祭太一東南郊，用太牢，七日，為壇開八通之鬼道。」と記されている。割注にある解釈によれば、「天宮」とはすなわち「紫微」であり、「北極（星）」で

[17] 劉昭瑞（1999）「『日本書紀』斉明紀の「天宮」について」、『東海大学紀要』（72）、神奈川、東海大学文学部、pp.101-122

[18] 槻、日本国語大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/Z7ynNV（2019/7/11 アクセス）

臺灣大學學術期刊資料庫

「天一」「太一」とも呼ばれているものであるという。さらに、紫宮は天皇の魂の在所で、この紫宮の外に天一と太一があり、天皇大帝（星）を仕えているという。『史記·封禪書』のほかに、『史記·天官書』では「中宮天極星，（中略）環之匡衛十二星，藩臣。皆曰紫宮。」とあるごとく、中宮北極星は十二星に囲まれ、天上の真ん中にある星である。また、『晉書·天文志』にも「紫宮垣十五星，其西蕃七，東蕃八，在北斗北。一曰紫微，大帝之坐也，天子之常居也，主命主度也。」と見える。これら漢籍の記事からも、「天宮＝紫微＝紫宮＝北極＝天一＝太一＝大帝之坐＝天子之常居」という構図が認められ、常に天上の真ん中にある不動の中宮北極星（紫宮、紫微）は天子の鎮座するところであり、天子の常の在所で、帝王の生死を司る星であることが分かる。

このように考えると、「斉明紀」における「両槻宮」は日本固有の神聖性を持つとともに、「天宮（紫微、紫宮、太一）」でもあるので、世界の中心に立っている不動の北極星をシンボライズし、(天皇)大帝・天子の在所を指しているといえる。このような「両槻宮」はいうまでもなく、斉明自身が世界の中心にある統治者としての身分を語ろうとする意図が内包されている。この点もまた前述した、蝦族を饗宴するための須彌山造営の概念と一致していよう。両方とも、蝦族に権威を示そうとし、自らが世界の中心に立ち、世界を統治する統治者になろうとする斉明天皇の「小中華思想」の具体化として捉えられるのである。

（三）狂心渠の造営

以上の須彌山と両槻宮に対して、狂心渠の造営はどうか。前掲した斉明二年是歳条の記事によれば、斉明天皇が工事を好んで、水工に渠を掘らせて、香山の西から石上山まで通したとある。舟二百隻に石上山の石を積み、流れに乗せて、宮の東の山まで引き運び、さらにその石を積み重ねて垣とした。時の人はこれを「狂心渠」と呼んでいたという。また、この渠を掘るために三万人余りが動員され、宮の東の垣をつくるのに七万人余りの人が使われた。宮を建築する用材は腐り、山頂に埋められたと非難された。このように、人民の体力および経済的負担をかけた狂心渠の造営は大きく批判されたことが描かれている。

なお、この狂心渠の造営も有間皇子の謀反の理由の一つとして書

臺灣大學學術期刊資料庫

き記されている。斉明四年十一月条では、斉明天皇が紀温湯に行幸していたとき、蘇我赤兄が斉明天皇の三つの失政を挙げ、孝徳天皇の子である有間皇子の謀反を挑発したという。その三つの失政はすなわち（1）大起倉庫積聚民財、（2）長穿渠水損費公糧（3）於舟載石運積爲丘。この中で、（2）と（3）は、狂心渠の造営を指している。

また、（2）と（3）を可能にさせたのは（1）の「大起倉庫積聚民財」によるものである。なぜなら、孝徳朝に実施された大化改新は中国の公地公民制、官僚制、税制、地方行政制度を学ぶことで、私有地、私有民、税賦を伴造・貴族の手から中央に回収する公地公民制を行うとともに、地方行政制度の整備、籍帳制度と班田制度の採用、田の調、戸別の調以下の詳細な統一的税制を行ったからである。人力・財力および土地がなければ、（1）の「大起倉庫積聚民財」を実現するのが不可能である。このようなことからも、（1）のごとく、斉明朝において多くの倉庫を作らせ、人民の財宝を集めることができたことからも、人力・財力および土地を積極的に中央に回収するという大化改新はある程度の成功を収めたと言えよう。

ともあれ、蘇我赤兄の挙げた斉明天皇の失政は狂心渠の造営に深く関連しており、有間皇子もそれを認めたために、兵を挙げようとした。当時の人々もこの無謀な浪費である工事を大きく非難していた様子は、以上に挙げた記事からもよく分かる。

しかし、この狂心渠はその名の通り斉明天皇の心が狂ったゆえに作られただけのものではなかった。木下正史氏[19]の考察によれば、

> 〈狂心ノ渠〉も藤原京の堀川の一つとして継承され、さらに幾本かの堀川を加えて、これらにつなげる形で大和川水系小河川を大きく改修するなど、大規模かつ系統的に水運網が整えられる。それは、都城における条坊道路や律令政府の経済基盤、都市住民の消費生活を支える物流の拠点となる東西市の設置、屎尿処理を含む下水・排水路網をどのように整えるか、といった都城の全体計画・基本計画の一環の中に位置づけられてくる。

という。また、丸山岩三氏[20]も次のように指摘している。

---

[19] 木下正史（2007）「古代都市の建設と土木工事～飛鳥・藤原京～」、『Civil Engineering Consultant』(237)、東京、一般社団法人 建設コンサルタンツ協会、pp.28-31

[20] 丸山岩三（1994）「奈良時代の奈良盆地とその周辺諸国の森林状態の変化(VI)」、『水利科学』38巻（2号）、東京、水利科学研究所、pp.83-112

臺灣大學圖書館期刊資料庫

このような溝がなぜ狂心渠なのかという疑問も起るが、狂心渠は決してその規模だけを指すものではなく、発掘成果の検討から、南北溝の掘さくはこの地域の土地利用としては画期的な内容のものであり、溝にともなう噴水や水時計関連の遺構も時期的に同じものとしてよいから、同時期の公的空間が相当広い範囲にわたって所在することが推定できる。このような空間利用は同時期の都城建設をおいては他に考えられないであろう。このように大和朝廷において、斉明朝の時期に画期的な都づくりが行われたと推考する。

それだけではなく、林部均『飛鳥の宮と藤原京-よみがえる古代王宮-[21]』では、それを「飛鳥の空間整備と荘厳化、すなわち周辺地域との差別化、象徴化の意義があった」と理解している。遠山美都男『古代日本の女帝とキサキ[22]』においても、斉明による一連の「興事」は、彼女の思いつきによる奢侈や浪費などではありえず、斉明は、皇極の時代から倭京建設に取り組んでいたのであり、斉明の時代になって「念願の倭京建設」を一挙に成し遂げようとしたと指摘している。

諸氏の指摘を踏まえれば、この狂心渠の造営は実に斉明朝の水路建設であり、都づくりの一環であったと捉えるべきである。この点は飛鳥寺近辺にある酒船石、小判形石造物と亀形石造物からも裏付けられよう。平成四年に酒船石の北の斜面で石垣が発見されたが、それは斉明二年条に記されている「宮の東の山に石を累ねて垣とす。」における石垣ではないかと考えられている。さらに、平成十二年の大規模な発掘により、小判形石造物と亀形石造物が発見されたが、この二つの石造物はいずれもため池のような穴があり、そのうえに細い水路が彫られている。さらに、続いて石を並べた溝や石段があり、全体を囲むように石垣や石敷がある。全体からみれば、人工湧水装置として作られたことが考えられるのである[23]。

これら考古学の研究成果に基づけば、飛鳥寺近辺に発見された石

---

21 林部均（2011）『飛鳥の宮と藤原京-よみがえる古代王宮-』、東京、吉川弘文館、pp.102-103

22 遠山美都男（2005）『古代日本の女帝とキサキ』、東京、角川書店、p.92、pp.100-101

23 酒船石およびその周辺の遺跡に関わる考古学の研究成果について、相原嘉之（2004）「酒船石遺跡の発掘調査成果とその意義」（『日本考古学』第 11 巻第 18 号、東京、日本考古学協会、pp.171-180）に詳しい。

臺灣大學日本語文學系 資料庫

垣や石敷は湧水装置のための水路と解してよかろう。このように考えると、「宮の東の山に石を累ねて垣とす。」における「宮」は実に高度の技術で作った湧水装置を備えた宮として考えられ、さらに狂心渠もまた酒船石、小判形石造物と亀形石造物と同じく、斉明の意識的に作った水路であるとして捉えるべきである。これらの水路づくりは、いずれも斉明が「念願の倭京建設」を実現させようとし、倭京を「周辺地域との差別化、象徴化」を付与しようとしていた営為なのである。

ちなみに、亀形石造物は神仙思想にも関連している。狂心渠の後に吉野宮が作られたが、吉野は不老不死の薬、仙丹の原料としての「丹」の産地である。吉野宮の前に流れている川は丹生川という名前を通しても、吉野と不老不死思想との関連が読み取れる。それと同時に、亀の形をする湧水装置もまた吉野宮の造営と同じく、長生不死の思想が働いていると想定できよう。

三、斉明朝の怪異事件

（一）乗竜者と鬼

さて、斉明天皇の晩年は百済の復興に力を貸すために、自らが軍兵を率いて、九州の朝倉宮に移った。しかし、間もなく斉明が朝倉宮で崩御すると、その葬儀が鬼に見られてしまったという。その関連記事は斉明七年七月・八月条に記されている。本文は次の通りである。

> 秋七月甲午朔丁巳、天皇崩于朝倉宮。八月甲子朔、皇太子奉徙天皇喪、還至磐瀬宮。是夕於朝倉山上有**鬼**、著大笠、臨視喪儀。衆皆嗟怪。

すなわち、斉明が七年七月に朝倉宮で崩御した。八月に皇太子中大兄皇子が葬儀を行った。その夜、朝倉山の上に、鬼があり、大笠を被って、葬儀を俯瞰したという。

さて、この八月条に現れた鬼は、「著大笠」と描かれているが、「笠を着る」といった表現は斉明元年五月条にも見える。

> 夏五月庚午朔、空中有乗竜者。貌似唐人。著青油笠、而自葛城嶺馳隠胆駒山。及至午時、従於住吉松嶺之上西向馳去。

空には龍に乗っている者がいた。その者は、唐人に似ていた。青

臺灣大學學術期刊資料庫

油笠を被っており、葛城嶺から膽駒山に駆けて隠れ、午時になると、吉松嶺の上から、西に向かって馳せ去ったという。これは斉明天皇が即位してから間もなくの記事である。

斉明元年五月条のこの記事と、斉明七年七月・八月条との記事について、荒木敏夫『可能性としての女帝』ではこの二つの記事の間に関連しており、元年五月条の不思議な物体（空中有乗竜者。貌似唐人）はすなわち、斉明七年八月条の「鬼」なのだと述べている[24]。また、斉明元年五月条の記事は、『扶桑略記』の「齊明天皇」条にも見えるが、この怪異事件の後には「時人言：「蘇我豐浦大臣（蝦夷）之靈也。」」と記されている。

『日本書紀』における「時人」について、土橋寛『古代歌謡全注釈　日本書紀編[25]』では次のように指摘している。

> 『書紀』には時人の歌というのがあって、歌の内容は社会時評であるが、これは史書の述作者が「時人」に名を借りて作った歌である。この場合の「時人」は童謡の解釈・説明者であるが、これも述作者の影法師と考えてよい。

また、小島憲之『上代日本文学と中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察 1[26]』では、

> 皇極紀の述作者が時人の言をかりて童謡の解釋を行ふのは、史書五行志の述作の方法をそのままねたものである。

とし、童謡が「主として人事を諷刺し、人事の前兆を暗に諭ふと云ったわざをなし、單なるウタではない」と説いている。

これらのことからも、『日本書紀』における「時人の歌」は「童謡」の持つ風刺・予言・予兆といった機能を有していることが分かる。さらに、『扶桑略記』の「齊明天皇」条には「時人言：「蘇我豐浦大臣（蝦夷）之靈也。」」とあるが、それは乙巳の変によって亡くなった蘇我蝦夷の目線に立つことによる、斉明天皇の崩御に対する風刺として捉えられよう。

ちなみに、斉明五年是歳条には、厳神之宮を修理する際に、役丁が使用していた葛を狐が噛い切り、犬が人の腕をかみ切って言屋神社の境内に放置したという怪異事件が書き記されている。この記事

---

[24] 荒木敏夫（1999）『可能性としての女帝』、東京、青木書店、pp.104-105
[25] 土橋寛（1998）『古代歌謡全注釈　日本書紀編』、東京、角川書店、p.333
[26] 小島憲之（1962）『上代日本文学と中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察 1』、東京、塙書房、pp.563-564

臺灣大學日本語文學系

の割注では「言屋、此云伊浮耶。天子崩兆。」とあるごとく、天子の崩御の「兆」とされている。「天子崩兆」という表現からも、斉明五年是歳条に記された怪異事件は斉明七年七月条の天皇崩御の「予告」と見なすことができよう。

（二）北海浜魚死而積、馬自行道於寺金堂

さて、上掲した斉明元年五月条、七年七月条のほかに、斉明四年是歳条にも怪異事件が見える。

> 是歳、越国守阿倍引田臣比羅夫討粛慎、献生羆二・羆皮七十枚。沙門智踰造指南車。①出雲国言、於北海浜魚死而積。厚三尺許、其大如鮨、雀啄針鱗。々長数寸。俗曰、雀入於海化而為魚。名曰雀魚。或本云、至庚申年七月、百済遣使奏言、大唐・新羅并力伐我。既以義慈王・々后・太子為虜而去。由是国家以兵士甲卒陣西北畔、繕修城柵。断塞山川之兆也。②又西海使小花下阿曇連頬垂自百済還言、百済伐新羅還時、馬自行道於寺金堂、昼夜勿息。唯食草時止。或本云、至庚申年、為敵所滅之応也。

この中で、①は出雲国の日本海海岸部になんらかの要因でもって、死んだ魚が大量に打ち上げられたことを物語っている。この大量に死んでしまった魚は「雀魚」と呼ばれる魚であり、「雀」が海に入って魚に化したものだと記されている。「雀入於海」という表現は、『大戴禮記』「易本命」には「鳥魚皆生於陰而屬於陽；故鳥魚皆卵；魚游於水，鳥飛於雲。故冬燕雀入於海，化而為蛤。」とある。「雀」が海に入って、「蛤」に化したという話である。ここにいう「蛤」とは「蛤」と解されており[27]、雀（鳥）と蛤（魚介類）との相互変換が可能であることが示唆されている。

さて、このような鳥（雀）と魚との変換については、『荘子[28]』「逍遙遊」にも見られる。『荘子』「逍遙遊」によれば、「北冥有魚，其名為鯤。鯤之大，不知其幾千里也。化而為鳥，其名為鵬。」というように、魚の大きいものは「鯤」と呼ばれ、その「鯤」は鳥に化すことができ、「鵬」となるという。したがって「斉明紀」における「雀魚」といった怪異事件の背後には、漢籍に見える鳥と魚介類との相互変換の概念が存在していることが考えられよう。

また、斉明四年是歳条の割注には「既以義慈王・々后・太子為虜

---

27 高明註訳（1989）『大戴禮記今註今譯』(國立編譯館中華叢書編審委員會編、台北、台灣商務印書館)の解釈による。

28 黄錦鋐註訳（1999）『新譯莊子讀本』、台北、三民書局

臺灣大學圖書館期刊資料庫

而去。由是国家以兵士甲卒陣西北畔、繕修城柵。断塞山川之兆也。」とあるが、雀魚の大量の死亡は、大唐・新羅が力を併せて百済を討伐しながらも、義慈王・王后・太子が虜に取られ、兵士が多く死に、山川も塞がれるという「予兆」と解されている。さらに、「雀喙針鱗」については、小林健彦「災害記録としての『日本書紀』をどう読むか[29]」において次のように述べられている。

> 「雀喙針鱗」を持った魚、すなわち、フグ目ハリセンボン科の魚類総称である針千本の容姿より想像される、矛と盾を象徴した表現法をもって、それが大量に死した状態、倭国の人民が戦乱に巻き込まれるかもしれないという災異を、凶兆として告知したことに他ならないのである。

上掲した斉明四年是歳条の割注の内容を小林氏の考察結果と併せてみれば、①の怪異事件は兵乱発生、兵事の失敗、百済の滅亡を予告するものとして捉えられよう。

そして、①の続きとして、②は馬が自ら寺の金堂を走り回り、昼夜して休むことがなく、ただ草を食う時に休むという怪事が記されている。百済より帰国した西海使の阿曇連頬垂が言ったように、それは百済が新羅を討伐した帰路に起きた馬の怪事であった。この怪事について、「或本云」では「至庚申年、為敵所滅之応也。」とあるごとく、それは百済が敵に滅ぼされたことと呼応しているものである。

以上のように、斉明四年是歳条における①も②も百済救援の失敗、百済の滅亡、多くの人民の死亡を物語っていることが窺える。

（三）艫舳相反、蠅群向西

つづいて、斉明六年是歳条にも次のような怪異事件が見える。

> 是歳、①欲為百済将伐新羅、乃勅駿河国造船。已訖、挽至続麻郊之時、其船夜中無故艫舳相反。衆知終敗。②科野国言、蠅群向西、飛踰巨坡。大十囲許、高至蒼天。或知救軍敗績之怪。③有童謡曰（後略）

この中で、①は百済を救援し新羅を征伐しようとするために、駿河国に軍船を作るように命令したが、軍船がすべて完成され、続麻郊[30]に運ばれた時、夜半に理由もなく、艫舳が相反してしまったと

[29] 小林健彦（2016）「災害記録としての『日本書紀』をどう読むか」、『古代史研究の最前線　日本書紀』、東京、洋泉社、pp.161-162

[30] 土橋寛、小西甚一校注（1963）『日本古典文学大系 3　古代歌謡集』(東京、岩

臺灣人文與藝術典藏資料庫

いう話である。

「舳艫」について、『日本書紀』では、神武天皇即位前紀戊午年の条に「皇師遂東、舳艫相接」とあり、孝徳天皇白雉二年の条には、「相接浮盈艫舳」とある。また、仲哀天皇八年の条に「抜取五百枝賢木立于船之舳艫.....」と記されており、天智天皇二年の条には、官軍の敗績の惨状を描いたところに「艫舳不得廻旋」という表現もある。これらの例を踏まえ、太田善磨「斉明紀童謡をめぐっての試論[31]」では、前の二例はただ「船舶」の意(神功皇后紀に「整艫船」と見えるのとほぼ同義)に用いられているようであり、後の二例は船の前部後部を意味していると見られるが、「斉明紀」の「艫舳相反」の説明に関してはきわめて具体性を欠き不親切であると述べている。

これに対して、『日本古典文学大系 3　古代歌謡集[32]』では「艫舳相反れり—船をつなぐ時は舳を岸につないでおく。それが夜中に逆になって艫の方が岸に向いていたので、戦破れて帰って来る前兆と考えたのである。」としている。

このように、「其船夜中無故艫舳相反。衆知終敗。」は具体的にどのようなことが起きたのかは不明だが、やはり船は尋常ではない状況であるため、「衆知終敗」とあるごとく、人々が百済救援の失敗を知ってしまったことが語られている。このようなことからも、この記事は「兵事の失敗」をシンボライズする「凶兆」として書き記されていることが分かる。

次に、②の記事について、十囲もある蠅の一群が巨坂(御坂)を踰えて西へ飛んで行ったと、科野(信濃)の国から怪異事件が報告された。滝川政次郎「七世紀の東亜の変局と日本書紀[33]」によれば、この「怪異は、五行家のいう介虫孽であって、木が金を侵することによって起こる妖である。」としている。さらに、『後漢書』「五行志一」にある「五行伝曰。好攻戦。軽百姓。(中略) 時則有詩妖。時則有介虫之孽。時則有犬禍。時則有口舌之痾。時則有白眚白祥。」という記述を踏まえ、滝川氏は『後漢書』「五行志一」の記事に関して、次

波書店、p.205 頭注)によれば、「続麻郊」とは、今の三重県多気郡上・下御糸村の地とされているという。

31 太田善磨 (1958)「斉明紀童謡をめぐっての試論」、『東京学芸大学研究報告』9、東京、東京学芸大学、pp.15-16

32 土橋寛・小西甚一、前掲注 30 書、p.205 頭注。

33 滝川政次郎 (1972)「七世紀の東亜の変局と日本書紀」、横田健一編『日本書紀研究　第六冊』、東京、塙書房、pp.218-220

臺灣大學圖書館藏資料庫

のように指摘している。

> 五行思想のオーソドックスである洪範五行伝に拠れば、介虫の孽及び詩妖は、人主が攻戦を好み、百姓の命を軽んじ、城郭を修飾し、辺疆を侵略しなどした場合に起こるものである。常に民衆の味方であり、個人の禍福の外には何物も考えない五行家は、百済救援も、天智天皇の攻戦を好ませられる趣味から行なわれたものと考えていたのかも知れない。故に蠅の群が西に向かって飛んだのを官軍敗績の兆と観るのは、このオーソドックスの判断を更に発展せしめたものであろう。

要するに、蠅の群が西に向かって飛んだことは、「或知救軍敗績」に繋がっており、百済救援軍の失敗を予言しているものなのである。このように、①「艫舳相反」と②「蠅群向西」といった怪異事件は、ともに百済救援の失敗を「予兆」しているのである。

ちなみに、漢籍の中で、「蝿」と比べれば、「蝗」が兵事の失敗をシンボライズする常套的表現である[34]。「蝿」は『詩經』「小雅・青蠅」、『論衡』「商蟲」のように「小人の讒言」を暗喩するものに多く用いられているのである[35]。「蝿」を以て、兵事の失敗をシンボライズする表現は「斉明紀」の特殊な表現法の一つとして認められよう。「斉明紀」以外にも漢籍と異なる表現で似た意義を示そうとするものがあるかどうかについては今後の課題として考察する必要がある。

（四）神祇壊殿、見宮中鬼火

「斉明紀」の怪異事件はこれらだけではない。斉明七年五月条には次のような記述がある。

---

[34] たとえば、『漢書』「五行志」には「征和三年秋，蝗；四年夏，蝗。先是一年，三將軍眾十餘萬征匈奴。征和三年，貳師七萬人沒不還。」とあり、『晉書・卷五・孝愍帝紀』には「六月丁巳朔，日有蝕之。大蝗。秋七月，劉曜攻北地，麴允帥步騎三萬救之。王師不戰而潰，北地太守麴昌奔于京師。」とある。

[35] 漢籍には「蠅」に関わる表現は「蝗」と比べれば、用例がかなり少ないが、中でも『詩經』の例が代表的である。『詩經』「小雅・青蠅」には「營營青蠅，止于樊。豈弟君子，無信讒言。營營青蠅，止于棘。讒人罔極，交亂四國。營營青蠅，止于榛。讒人罔極，構我二人。」とある。また、『論衡』「商蟲」の中でも、この『詩經』の内容を引用し、次のような内容がある。

> 《詩》云：「營營青蠅，止于藩。愷悌君子，無信讒言。」讒言傷善，青蠅污白，同一禍敗，《詩》以為興。昌邑王夢西階下有積蠅矢，明旦召問郎中龔遂。遂對曰：「蠅者、讒人之象也。夫矢積於階下，王將用讒臣之言也。」由此言之，蠅之為蟲，應人君用讒，何故不謂蠅為災乎？如蠅可以為災，夫蠅歲生，世間人君常用讒乎？

これらの用例に描かれている「蠅者、讒人之象也」とあるごとく、蝿は小人の讒言を暗喩しているのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

五月乙未朔癸卯、天皇遷居于朝倉橘広庭宮。是時、斬除朝倉社木、而作此宮之故、神忿壊殿。亦見宮中鬼火。由是、大舎人及諸近侍、病死者衆。

斉明天皇が百済救援のために、九州に赴き、五月に朝倉宮（現福岡県朝倉市）に移った。その時、朝倉社の木を切って、朝倉宮を作ったため、神が怒って宮殿を壊した。さらに、宮中にも鬼火が見えるようになった。そのゆえに、大舎人及び諸近侍が多く亡くなったという。「由是」という表現から、多くの宮人たちの死亡が、宮中で鬼火が現れたことに起因していたことが分かる。さらにその二か月後、天皇が崩御し、八月の天皇の葬儀の場で鬼が葬儀を眺めることとなる。この一連の記事からも、斉明七年五月条において朝倉宮に「鬼（火）」が現れると、多くの人が病死し、その二か月後、天皇が朝倉宮で崩御し、その後に鬼が天皇の葬儀を眺めみたというプロセスが窺える。

このように、斉明七年五月条から八月条にわたり「鬼」が頻繁に現れている。その上、「斉明紀」では冒頭部と最終部ともに不思議（鬼）な事件が記されており、首尾一貫をなしている。すなわち「斉明紀」では、意図的にこれら「鬼」および怪異事件を用いて、天皇の崩御を予告したり、風刺したりして、百済の滅亡、兵事の失敗などをシンボライズしていることが以上の考察を通して窺えるのである。

三、おわりに

以上は「斉明紀」における大規模土木工事（須弥山、両槻宮、狂心の渠が代表的である）および怪異事件を中心に考察してきた。これら考察を通して次のようなことが分かる。

（1）須弥山と両槻宮といった宮殿づくりの工事は、仏教思想と神仙思想を内包していると同時に、自らの神聖性および大和王朝の権威を示し、蛮族などを服属させるという意義がある。そこには大和王朝を世界の中心とする「小中華思想」が語られている。

（2）「狂心の渠」を始め、「斉明紀」に記されている大規模土木工事は単なる斉明天皇の「狂心」によって作られたものではなく、水路設備および湧水装置の機能を考慮した上に、「都市づくり」の一環として作られたものと考えられる。皇極天皇の時代と違い、斉明天皇

臺灣大學學術期刊資料庫

は積極的に様々な大型かつ国家規模の建設を進め、新しい都市計画にエネルギーを注いだのである。この都市建設により、斉明朝の公の空間は宗教、政治、および水路といった実用性のある、多重的な機能を持つ、これまでと異なる近代化された空間と言える都ができたのである。

（3）「斉明紀」の冒頭から末尾まで、不気味な怪異現象に付きまとわれていた。これらの怪異事件を通じて、斉明天皇の朝倉宮での急死と百済救援の失敗が予告されている。つまり、「斉明紀」に記されている多くの怪異事件は、「予告」または「風刺」の機能を持つ。これは中国の童謡および時人言の用い方に近似しており、中国史書五行志の述作方法を学んだものだと考えられる。

このように、大規模土木工事と怪異事件に関わる記事は「斉明紀」における記述の二大重点だが、大規模土木工事の記事を通して、仏教、道教、神仙思想、太一の思想といった宗教的な一面が示唆されると同時に、中華思想をまねた「小中華思想」も示され、斉明女帝の「念願の倭京」の建設の経緯も語られている。そして、怪異事件の記事を通しては、中国史書の五行志を始め、漢籍によく見える予告・比喩・風刺の手法が頻繁に用いられているのである。これらのことからも、『日本書紀』「斉明紀」は中国の思想・漢籍の表現からの影響が大きいと言えよう。

それに加えて、これらの中国の思想・漢籍の表現を通して、近代化および周囲の地域と差別化された新しい都市建設に腐心する斉明天皇の形象が描き出されている。さらに、蛮族を饗宴したり、征伐したりして、百済救援のために自ら軍隊を率いた政治の野心が満ち、行動力のあるパワフルな斉明天皇像も示されているのである。

一方、この皇極・斉明天皇について、『日本書紀』では「皇極紀」と「斉明紀」を以って記録しているが、この二紀の間に描かれている宝皇女の形象は異なっている。たとえば、祈雨の成功により、「有徳天皇」と賞賛された皇極天皇に対して、土木工事（多武峯の二槻宮、狂心渠など）を好んで、多大な民の労力を費やして強く多いに非難されていた斉明天皇である。なぜ「皇極紀」と「斉明紀」に描かれている宝皇女の形象はこうした相違が生ずるのか。この問題については、皇極天皇と斉明天皇の時代背景が深く関わっていよう。

皇極時代の宝皇女は夫舒明天皇が亡くなってから、後継者が未定

臺灣大學學術期刊資料庫

である状態で、蘇我蝦夷らの要請によって、天皇の位に即した。だが、当時は蘇我氏の強い威勢の中で、まだ足を固めていないところもあった。その中で中大兄皇子・中臣鎌足の謀略により乙巳の変が起き、蘇我蝦夷・蘇我入鹿を中心とした蘇我本宗家が滅びてしまう事態となる。さらに、孝徳天皇の時代に入ると、日本古代の最大な政治改革とされる大化改新が行われたのであった。

大化改新とは中国の公地公民制、官僚制、税制、地方行政制度を学び、私有地、私有民、税賦を伴造・貴族の手から中央に回収する公地公民制を行うとともに、地方行政制度の整備、籍帳制度と班田制度の採用、田の調、戸別の調以下の詳細な統一的税制を実施するものであった。要するに、中国の皇帝を中心とする高度の中央集権体制を模倣し、日本で高度の中央集権制度を作ろうとしていた政治改革であった。この中央集権の政策によって、天皇家は一気に政治実権を高めることとなる。このような背景があったからこそ、皇極時代には実行できなかった都市建設に対し、斉明天皇が勇敢に挑戦することができたのではないか。「皇極紀」と「斉明紀」に記されている宝皇女の形象の相違もこうした時代背景の違いによって生じたものと考えられよう。

このように、宝皇女は斉明時代に入ると、大和王朝の権威を示す、小中華思想を体現する大規模土木工事(須弥山、両槻宮、狂心渠など)を次々と作り出した。なお、百済救援の軍隊を出すのも、斉明天皇の持つ小中華思想に基づいた行動だと理解できる。

ただし、この小中華思想は決して斉明天皇の独自的なものではない。『日本書紀』「舒明紀」舒明元年条、舒明十年条に記されている百済・新羅・任那の朝貢記事、また舒明十一年冬十一月条、十二年冬十月条に見える、舒明天皇が新羅・百済の使者に冠位・爵を授与したことからも、舒明天皇が「小中華思想」を強く持っていたことが窺える[36]。このようなことからも、夫舒明天皇の崩御後、即位した皇極天皇は夫の生前の意思である「小中華思想」を受け継いで、ようやく大化改新を経て、斉明朝に入って結実したのだと想定できよう。

しかし、舒明天皇の持つ小中華思想もむろんゼロから始まったわ

[36] 舒明天皇の小中華思想について、鄭家瑜（2020）「『日本書紀』における「舒明紀」の記述方法—漢籍との関わりを視座として—」（『台湾日本語文学報』第47期、台北、台湾日本語文学会）に詳しい。

臺灣大學圖書館藏資料庫

けではなく、推古天皇時代に憲法十七条を推進した聖徳太子からの影響が大きかったと考えられる。さらに、推古朝では日本初の須弥山造営の記事が見える。舒明天皇と皇極・斉明天皇が如何に推古天皇時代の思想または政治政策の影響を受けたのかについても重要な問題だが、紙幅の関係で別稿に譲りたい。

【付記】本稿は『《日本書紀》之漢籍典據與表現--以「皇極紀」「孝徳紀」「齊明紀」「天智紀」為中心』(台湾行政院国家科学委員会、NSC 106-2410-H-004-020-MY3)の研究成果の一部である。論文掲載に当たり、査読の先生方から貴重なコメントをいただいたこと、記して心から御礼を申し上げたい。

【テキスト】(配列は作者名の五十音順による)

(日本語)

黒板勝美ほか編(1965)『新訂増補国史大系第十二巻　扶桑略　記』、東京、吉川弘文館

黒板勝美ほか編(1966)『新訂増補国史大系第二十三巻　令集解前編』、東京、吉川弘文館

小島憲之ほか校注・訳(1998)『新編日本古典文学全集 4—日本書紀 3』、東京、小学館

(中国語)

王雲五主編(1981)『四庫全書珍本十一集 長安志 朝鮮賦 朝鮮制』、新北、臺灣商務印書館

韓兆琦注訳(2008)『新譯史記(三)書』、台北、三民書局

韓復智注訳(2005)『論衡今註今譯(中冊)』、台北、國立編譯館

魏連科ほか校注・訳(2013)『新譯後漢書(九)志一』、台北、三民書局

黃錦鋐註訳(1999)『新譯莊子讀本』、台北、三民書局

高明註訳(1989)『大戴禮記今註今譯』、國立編譯館中華叢書編審委員會編、台北、台灣商務印書館

吳榮曾、劉華祝ほか注訳(2013)『新譯漢書(四)志二』、台北、三民書

臺灣大學學術期刊資料庫

局
滕志賢注訳（2000）『新譯詩經讀本』、台北、三民書局
楊家駱主編（1975）『中國學術類編 新校本魏書附西魏書』第四冊（全四冊）、台北、鼎文書局
楊家駱主編（1976）『新校本晉書并附編六種』第一冊（全六冊）、台北、鼎文書局
楊家駱主編（1985）『中國學術類編 新校本史記三家注并附二種』第二冊（全四冊）、台北、鼎文書局
楊家駱主編（2000）『新校本舊唐書附索引』第六冊（全六冊）、台北、鼎文書局

【参考文献】（配列は作者名の五十音順による）

（日本語）

相原嘉之（2004）「酒船石遺跡の発掘調査成果とその意義」、『日本考古学』第 11 巻第 18 号、東京、日本考古学協会
荒木敏夫（1999）『可能性としての女帝』、東京、青木書店
石母田正（1973）『日本古代国家論　第一部』、東京、岩波書店
入江曜子（2016）『古代東アジアの女帝』、東京、岩波書店
太田善磨（1958）「斉明紀童謡をめぐっての試論」、『東京学芸大学研究報告』9、東京、東京学芸大学
木下正史（2007）「古代都市の建設と土木工事～飛鳥・藤原京～」、『Civil Engineering Consultant』(237)、東京、一般社団法人 建設コンサルタンツ協会
小島憲之（1962）『上代日本文学と中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察 1』、東京、塙書房
小林健彦（2016）「災害記録としての『日本書紀』をどう読むか」、『古代史研究の最前線　日本書紀』、東京、洋泉社
川本芳昭（2002）「漢唐間における「新」中華意識の形成：古代日本・朝鮮と中国との関連をめぐって」『九州大学東洋史論集.30』、福岡、九州大学文学部東洋史研究会

臺灣大學學術期刊資料庫

滝川政次郎（1972）「七世紀の東亜の変局と日本書紀」、横田健一編『日本書紀研究　第六冊』、東京、塙書房
土橋寛、小西甚一校注（1963）『日本古典文学大系 3　古代歌謡集』、東京、岩波書店
土橋寛（1998）『古代歌謡全注釈　日本書紀編』、東京、角川書店（1976.08 初版）
常塚聴（2009）「日本における須彌山説の受容—世界観の接触の事例として—」、本多弘之編『現代と親鸞』（17）、東京、親鸞仏教センター（真宗大谷派）
鄭家瑜（2020）「『日本書紀』が語る対外戦争—白村江の戦いを中心に—」『政大日本研究』第 17 号、台北、政治大学日本語文学科
鄭家瑜（2020）「『日本書紀』における「舒明紀」の記述方法—漢籍との関わりを視座として—」『台湾日本語文学報』第 47 期、台北、台湾日本語文学会
遠山美都男（2005）『古代日本の女帝とキサキ』、東京、角川書店
林部均（2011）『飛鳥の宮と藤原京-よみがえる古代王宮-』、東京、吉川弘文館
丸山岩三（1994）「奈良時代の奈良盆地とその周辺諸国の森林状態の変化(VI)」、『水利科学』38 巻（2 号）、東京、水利科学研究所
三橋正（2007）「仏教受容と神祇信仰の形成—神仏習合の源流—」『宗教研究　特集　神仏習合とモダニティ』81 巻（2 号）、東京、日本宗教学会
森公章（1998）『「白村江」以後—国家危機と東アジア外交』、東京、講談社
劉昭瑞（1999）「『日本書紀』斉明紀の「天宮」について」『東海大学紀要』（72）、神奈川、東海大学文学部

（中国語）

姜智恩（2017）「“華夷秩序”的東亞構架與自解體內情」（『中央研究院近代史研究所集刊』第 96 期、台北、中央研究院近代史研究所
倪佑密（2012）「古代日本華夷思想的萌芽以及發展軌跡——以漢唐時

臺灣大學學術期刊資料庫

期中日外交文書為中心」『青年文學家』第 11 期、黑龙江齐齐哈尔、青年文学家杂志社
謝桂娟（2015）『華夷觀與傳統東亞國際秩序研究』、吉林、延邊大學世界史研究所

【ウェブサイト】（配列は閲覧日による）

国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/N6yaAk
（2019/7/25 アクセス）
日本国語大辞典、JapanKnowledge、https://reurl.cc/gmavQN
（2020/4/16 アクセス）
日本国語大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/Z7ynNV
（2019/7/11 アクセス）
大辞林 第三版、japanknowledge、https://reurl.cc/5qorA6
（2020/8/24 アクセス）
世界大百科事典 第２版、japanknowledge、https://reurl.cc/GrdmM3
（2020/8/24 アクセス）
国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/XkeW90
（2020/8/24 アクセス）
国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/0O0M1o
（2020/11/28 アクセス）
国史大辞典、japanknowledge、https://reurl.cc/R1G3ke
（2020/11/28 アクセス）
新選漢和辞典 Web 版、japanknowledge、https://reurl.cc/XkKkY3
（2020/12/3 アクセス）
新選漢和辞典 Web 版、japanknowledge、https://reurl.cc/m9K9jW
（2020/12/3 アクセス）

臺灣大學學術期刊資料庫